

若者の生活世界から見る上昇移動への熱望

——『中国青年』雑誌（1978～1984年）の読者投書を手掛かりに——

王 鳳

- 1 問題意識
- 2 改革開放以降の社会意識に関する先行研究
- 3 本論文の分析枠組
- 4 1978年～1984年における若者の生活世界
- 5 結論

1 問題意識

改革開放以降の中国の社会意識の変容について、集団本位から個人本位に変わってきたという言い方が一般的である¹。特に90年代以降市場経済体制が導入されてからの中国社会で起こったさまざまな問題点の原因に関する言説として、「(私的利益に指向する)欲望の氾濫」という言葉が、個人本位の代名詞として多々使われる。そして、人々が自分自身の利益のみに関心を持つ「ダメな90年代」の反面として、集団本位がまだ残っている「古き良き時代」としての80年代がしばしば取り上げられる²。では、改革開放初期の人々は、本当に当時中国政府の公式見解で唱えられていた集団本位で生きていたのだろうか。もしそうでなければ、彼らはどのようにその時代を認識していただろうか。

1970年代末から1984年までの、人々を取り巻く社会経済的状況が大きく変化していく中で、それまで政治的身分制を主とする階層構造も変わり、階層の上昇移動が可能となった。さまざまな要素が関わっている中で、若者の上昇志向というエネルギーが非常に強い度合いで触発された。この点について、改革開放以降の中国社会の個人化の進展について研究した閻雲翔は1978年に始まった改革開放以降の中国では、労働と経済の私有化、身分制や単位制度などというそれまでの身分制的な規制が緩和されたことによって、人々は毛沢東時代の家父長制のような再分配体制による拘束から自由になったことにより、個人

1 中国社会科学院 1993『中国青年大透視——関与一代人的価値観演變』北京出版社

2 王曉明 2000「90年代与新意識形態」林大中編『90年代文集』；許紀霖 2007「世俗社会的中国人精神生活」『天涯』2007年第10号

化が進み、個人同士の競争が激しくなったと指摘した³。1977年に大学受験制度の再開、80年代官僚選抜における学歴の重視、計画経済から市場経済への改革を通して企業経営における能力主義の導入などを見ると、1978年以降の中国社会は、能力による選抜を「正当化根拠」とする社会＝メリトクラシー社会に移行しつつあるように見える。

一方、文化大革命が終了した当初の政府は、「四つの現代化」という国家目標を訴えることによって、人々を国家建設運動の中に取り込もうと努力し、そのような枠から外れるような言動に対して取り締まりを行った。すなわち、若者を取り巻く環境としての公的イデオロギーも、加熱と鎮めという二つの方向で、人々の階層移動をコントロールしようとしたわけである。公的イデオロギーによる国家建設運動への呼びかけと、私的動機による「個人奮闘」に対する批判が両方動いている中で、若者たち自身がどのようにして競争社会になりつつある中国社会を生き、階層の上昇移動を意識し、行動しようとするのだろうか。

以上のような問題意識のもとで、本論文は、改革開放の始まりであった70年代末から1980年初期の中国社会では、人々はどのような認識を持って階層の上層移動を志向していたかについて考察を行う。具体的には、雑誌『中国青年』（1978年～1984年）に掲載された読者投書を資料に、そのような公的な文化装置とは違う論理で動いている若者の生活世界に注目し、主に進学、職業、恋愛結婚という三つの面から、階層の上層移動を巡るその意識にアプローチした。そのうえで、階層ヒエラルキーの存在に関する認知、どのようにして上層移動を果たそうとしてどのような悩みを持っていたか、当時の社会秩序のあり方に対してどのような態度を取っていたかという三つの面から考察を行い、若者の上層意識のありようを描いていく。

2 改革開放以降の社会意識に関する先行研究

この節では、改革開放以降の1970年代末から80年代初期の中国における人々の階層上昇志向に近づくために、これに関連する先行研究について整理する。

これらの研究は、大きく三つに分類できる。まずは従来の中国の社会学分野で行われてきた社会意識の研究、とりわけ若者の価値観に関する研究がある。次に、「伝統から近代へ」という視点からの意識研究がある。

2-1 若者（青年）価値観の視点からの意識研究

社会意識の研究というと、中国本土で行われている社会学研究の領域で一番近いのは「価値観」の研究になる。80年代以降に中国の社会学が復興してから、若者の意識に関す

3 閻雲翔 2012『中国社会の個体化』上海訳文出版社

る研究——いわゆる「青年価値観」研究——が社会学研究の重要な分野として盛んに行われるようになった（陸建華 1992：23；蘇頌興・胡振平 2000：35）。

改革以降における若者（青年）の価値観の変容についての研究は、改革開放前の官製イデオロギーである「社会主義イデオロギー」との関係に着目するものが多くみられる。

まずは、「思想教育」や「精神文明」の構築という角度から、青年の価値観の変化をマイナスな変化として描くものであり、代表的な研究に単光竊（1994）や蘇頌興&胡振平（2000）、石海兵（2007）等がある。これらの研究では、人々の価値観が統合されていない現状に関して、「主流社会は、青年にとって求心力と凝集力のある社会総体価値目標を提示していない」と「主流社会」に責任を見いだす一方、青年たちの意識の問題点を指摘し、「問題視」する立場を取っており、「青年たちは、人生の目標に対して戸惑い、理想主義的な追求に欠けており、また社会的責任感と社会服務精神に欠けていて、政治意識も薄い。逆に、実用主義、個人主義、拝金主義、享楽主義は、青年たちに強い魅力をもっており、一部分の青年にとっての最高の価値目標になっている」と指摘した（単光竊 1994：34）。

次に、「思想教育」を主張する上記の見方に批判的な目線を投じて、社会統合を重要視する立場の研究がある。これらの研究は、社会統合のためにいかにして青年の価値観をまとめればよいか政府に提言する。その代表的な研究に陸建華（1992）、中国社会科学院（1993）があげられる。陸建華（1992）は、改革開放以前の「画一化された、抽象的な、絶対的な価値基準」による価値統合システムを批判する。青年たちに対して「開放」的で、「寛容」な態度で、「扶助」すべきだと論じている。また中国社会科学院（1993）は、政治的な価値基準を中心に据えた社会主義イデオロギーに主導されていた50～60年代の価値体系⁴が崩れ、青年価値観の変容は質的な転換点を迎えており、①集団本位から個人本位へ②単一志向より多元志向へ③理想主義的な価値目標から世俗的な価値目標へと変化していると指摘した（中国社会科学院 1993：14）。また、青年価値観の新たな傾向について「個人本位、多元化、及び世俗と物質主義への傾斜は人間の発展に合うものであり、この変容は伝統的な観念による人間性の束縛や抑圧から人々を解放し、個人の選択や個人の考え方、個人の需要を尊重する社会に導くだろう」と積極的に評価をしてもいる（中国社会科学院 1993：23）。

上記二種類の研究は、基本的に「50～60年代に出来上がった」社会主義イデオロギーを原点にし、この原点から改革開放後の中国社会を見たときに青年の意識にどのような変

4 その内容に関して著者は次のように説明している。「この価値体系の三つの内容は、①一元化された政治体制を基礎とする政治権威や、政治目的を最高の価値判断の基準とする。②計画経済を基礎とする対平等主義。③社会主義イデオロギーを基礎とする集体主義と利他主義」。中国社会科学院 1993 p 23

化があったかを中心に考察するものである。集団主義から個人主義への変化に関しては、「統合されていない」或いは「混乱している」というような言葉で表現し、どのように評価すべきか戸惑っている感が強い。

2-2 伝統から近代へという「社会転型」の視点からの意識研究

上記の価値観研究以外に、改革開放以降の中国社会の変化を伝統から近代への「転型」と捉え、近代社会にふさわしい人間像という物差しを持って眺める時に人々の意識にどのような変化があったかを捉える先行研究もある。代表的な研究に孫嘉明（1997）、肖海鵬（2002）、李興武&王大路（1993）、嚴翹君（1993）がある。

この角度からの研究は、「現代化を達成するには内在的な条件、思想観念の面の条件」が必要だと考え、近代化に向けてどのような価値観がふさわしいかというまなざしを持って意識の変遷をたどっている（肖海鵬 2002：1）。これらの研究はアメリカの学者 A・イングレスの「人間の近代化」やマルクスの「人間の全面的な発展」を頻繁に引用し、「その国の国民が近代的な国民でない限り、国家は近代的な国家ではない」という視点から、近代化に相応しい意識の変化は「個人の主体性による選択を基本とする全面的な自己実現」だとして、その必要性を積極的に論じている（肖海鵬 2002：39）。人々の価値観に以下のような変化について、①従属意識から主体意識へと変わり、現代人に相応しい素質として主体意識、選択的行為、個人の独立した思考などを持つようになった。②集団意識から公共意識へ、③貴賤意識から平等意識への変化があったと指摘する（孫嘉明 1997：184）。

2-3 先行研究の考察

上記に取り上げられた二種類の先行研究は、改革初期の80年代に起こった価値観の変化について、人々の価値目標が理想主義から現実主義へと変化し、国家・社会へのコミットメントから個人の生活を重んじる個人本位になるにつれ、世俗・物質主義的な傾向が強くなってきているというように、時代の流れをある意味で的確に指摘した。

しかし一方、「集団本位から個人本位へ」「理想主義的な価値目標から世俗的な価値目標へ」「個人本位、多元化、及び世俗と物質主義への傾斜」というこの時期の社会意識の変化に関する描き方は、政治社会的な色彩の強い1970年代末から1980年代初期の人々の意識の変化をとらえるのに本当に有効だろうか。「集団本位から個人本位へ」という言い方は、この時期に入ってから公式イデオロギーによる政治的拘束力が徐々にゆるんでいくことの説明になるが、個々人の内面の意識の解明とは程遠いものであろう。

したがって本研究では、政治社会から脱皮し始める段階の80年代初期の中国社会であるからこそ、人々の意識や行動に対して多大な影響力を持つ文化的構築物、——本論文では政府の公式イデオロギーを指すが——の存在を考慮する必要があると考える。すなわ

ち、この時期の社会意識の変容を有効にとらえるために、政府の公式イデオロギーの意図と人々の自分自身の経験による社会への認知、という二つの補助線を導入し、この二つの論理を峻別し、そして同時に視野に入れて考察していくという分析枠組みをとる。

3 本論文の分析枠組

3-1 分析枠組としての文化装置論と生活世界の論理

ミルズは、文化と政治の関係や文化に関する政治について論じる際に、文化装置という言葉进行分析の道具として提起した。ミルズの言葉を借りて文化装置を紹介すると、人間の意識とかれらの物質的存在との間には、存在に関する人々の意識に決定的影響を与える解釈、というものがある。この解釈の仕組みを用意するものは、文化装置である。文化装置の内部で、人間と出来事の間であって、人間の生きる世界を限定するイメージや意味やスローガンが組織されたり、比較されたり、維持されたり修正されたり、また消滅、育成、隠蔽、暴露、称されたりする。文化装置の中で、芸術、科学、学問、娯楽、笑話、情報が生み出され分配される。それによって、これらの生産物は分配され、消費される。それは、学校、劇場、新聞、人口調査局、撮影所、図書館、小雑誌、ラジオ放送網といった複雑な一連の諸施設をもっている (Mills 1959=1984)。

一方、人々の意識を形づくる文化的構築物の存在について、アルチュセールは、「国家のイデオロギー装置」との概念を提起した。アルチュセールは、「生産諸関係の再生産はいかにして保証されるか」(Althusser 1995=2005: 340) について検討する際に、「生産諸関係の再生産は、きわめて大きな部分が、一方における<国家(の抑圧)装置>と他方における<国家のイデオロギー諸装置>という<国家の諸装置>における国家権力の行使によって保証されている」(Althusser 1995=2005: 340-1) と述べた。アルチュセールによれば、国家(の抑圧)装置は政府、行政機関、軍隊、警察、裁判所、刑務所など「暴力的に機能する」ものを指すのに対して、国家のイデオロギー諸装置は宗教、学校、家族、新聞やテレビなどのメディア、文学や美術のような文化的産物など「イデオロギー的に」機能するものを指す⁵ (Althusser 1995=2005: 335-6)。

ミルズの「文化装置」とアルチュセールの「国家のイデオロギー装置」、この二つの理論で共通する点をまとめると、人間の意識形成に重要な影響を与えるものとして、「人間と出来事の間であって、人間の生きる世界を限定する」解釈の枠組、「諸個人の存在の現

5 さまざまな国家のイデオロギー諸装置の中でアルチュセールは、かつての時代において教会が支配的なイデオロギー装置であったのに対して、「成熟した資本主義的構成体において支配的な地位を占めるに至った<国家のイデオロギー装置>は、学校的イデオロギー装置なのである」と言い、近代に入ってから、学校装置の支配的役割を強調した。

実的諸条件」に関する「想像」といったような文化的構築物があると言えよう。したがって、個人の内面の意識に近づくには、この文化的構築物＝文化装置に対する考察が非常に重要であろう。

一方、「諸個人が自らの現実的な存在諸条件に対してもつ想像的な関係の『表象』である」というアルチュセールによるイデオロギーの定義を考える場合に、具体的な個人にとって、「自らの現実的な存在諸条件に対して持つ」想像は、国家のイデオロギー装置や公的文化装置に規定されるもの以外に、人々が自分自身の生活経験から感知したことによって、公的イデオロギーとは別のイデオロギーや想像を形成させることもありうるだろう。本論文では、人々が自分自身の生活体験に基づき形成された、「自らの現実的存在諸条件」に対して持つ想像を、生活世界の論理と呼ぶ。

本論文では、人々の意識に近づくためには、公的イデオロギー＝国家のイデオロギー装置の提供する存在に関する解釈の枠組みを公的文化装置として重要な位置づけにあると認めながらも、それのみならず、人々が現実世界に対する認知や感知に基づいて形成された彼ら自らの世界観＝彼ら自身の人生体験に基づく存在に関する解釈の枠組みという、もう一つの要素があると提起したい。即ち、改革開放以降の中国社会を生きる人々の意識に近づくには、国家のイデオロギー装置の提供する解釈の枠組み＝公的文化装置の論理と、人々が自身の体験に基づいた解釈の枠組み＝生活世界の論理という二つの要素を、同時に視野に置いて考察する必要があると指摘したい。

便宜上、以下では、公的・社会的イデオロギー装置によって提供された解釈の枠組みを文化装置による公的文化装置の論理と呼び、人々が自身の人生体験に基づいた現実世界に対する解釈の枠組みを生活世界の論理と呼ぼう。

3-2 社会区分に関する公的文化装置の語り方

上述したように、1978年から80年代初期の中国では、社会経済状況が大きく変わり始めているが、一方、この時期において、国家イデオロギーによる文化装置の公式見解では、すべての職業は四つの現代化に貢献するもので平等であるとされており、階層構造の存在、社会構造的に不平等があること自体が否定されていた。右図のように1984年第3号に掲載された、



「平凡な仕事、綺麗な心」と題する絵は、当時の国家イデオロギーを明確に語るものであり、絵の登場人物は清掃の作業をしている意気揚々の若い女性で、その職業は清掃員であるが、「青春の最も美しい火花を咲かせよう」という題名となっており、清

掃員のような職業でも、ほかの職業と同じく国家や社会に貢献する職業であり、「美しい」職業だというイメージを伝達しようとする。

これについて園田茂人は『不平等国家中国』の中で、マルクス主義を国是に、平等社会を理想とした政治社会の中国では、階層化の存在が否定されていたと指摘したが、このような状況は80年代初期まで続いていた。この点は、上記のようにプロパガンダ誌の特徴の強い当時の『中国青年』誌の表紙やコラムにも明確に観察される。

当時の中国では、下記のとおり写真1-4に象徴されたように⁶、「四つの現代化」という国家目標が設定され、その中で若者はこの目標の実現に貢献すべく、知識の習得に努力すべきだという位置づけをもってその役割を期待された。一方、この国家論理を通して個人の努力が奨励されるようになったが、その努力の動機は国家という「公」のためか、それとも個人の生活という「私」的なもののためか常に選定が行われており、「私」的な



写真1



写真2



写真3



写真4

-
- 6 写真1：1978年第1号『中国青年』誌表紙、題名は「華主席と共に新たな長征を」。
写真2：1978年第2号『中国青年』誌表紙、題名は「わが青春を新たな長征に捧げよう」。
写真3：1979年第2号『中国青年』誌表紙、題名なし。
写真4：1979年第5号『中国青年』誌表紙、題名なし。

動機は批判・規制されていた。若者の上昇志向に関するエネルギーは、国家目標の実現という公的なものに収斂されようとしたのである。

一方で社会経済状況の変化を身を持って体感しており、もう一方で、公的文化装置からは「集団本位」に立脚した知識の吸収を勧められている。では、70年代末80年代初期を生きる人々は、この時期の社会の在り方に対してどのように認識しており、そして、どのように上昇移動を果たそうとするだろうか。以下第4節では、詳しく考察していきたい。

4 1978年～1984年における若者の生活世界

本節では、『中国青年』に掲載された若者の投書から、公的な文化装置とは違う論理で動いている若者の生活世界にアプローチする。『中国青年』に掲載された読者の声を「学業」「職業」「恋愛・結婚」という三つの分類にしたうえで、①階層ヒエラルキー、即ち社会区分の存在に関する認知はどのようなものであるか、②どのようにして上層移動を果たそうとして、そしてどのような悩みを持ったか、③社会秩序のあり方に対してどのような態度を持っていたか、という三つの面から考察していきたいと考える。

4-1 研究資料としての『中国青年』雑誌

『中国青年』雑誌は、1923年に創刊された共青团中央の機関誌である。1980年初頭、青年雑誌は国のメディア政策により、文化的商品としての属性が認められた。その中で『中国青年』雑誌もプロパガンダ誌から徐々に変化し、総合雑誌の性格を帯びようになり広く読まれていたが、1980年初頭にその全盛期を迎え、一時は350万部の発行部数を誇っていた。中国の数多くのメディアの中でも、共産主義青年団中央の機関誌として党の政策や路線を伝え、共産主義イデオロギーをもって若者を教化する「赤い雑誌」であることが『中国青年』の最も大きな特徴とされるが、若者の教化という目的から、悩みのある若者に正しい道筋を提示しようと、読者の悩み相談を数多く掲載しており、同時の人々の考え方を知るのに非常に貴重な資料となっている。

現在の『中国青年』は、青年団中央の機関誌であるとともに、中国全体の雑誌種類の中で約5%を占める文化総合誌の一つであり、社会問題や若者の生活全般に関する報道内容が多く盛り込まれた文化総合雑誌でもある。個人の読者による購読以外に、主に各地の青年団組織による公費での購読がなされている。

4-2 「登竜門」とされる大学受験——学業に関する読者の声

この時期の『中国青年』雑誌には、学業に関する投書が大量に見られた。これらの投書はその内容から分類すると、学習効率を上げる方法や受験の注意点などのノウハウ型の投書、大学受験に対する受験生の不安や焦燥感を反映する投書、大学入試の競争の激化によ

る中高生への心理的負担のしわ寄せに関する投書など、三つの種類に大別できる。

4-2-1 学習効率を上げる方法や受験の注意点などのノウハウ

この類の投書は、大学入試の前後の過程をめぐって、いかにして学習の効率を上げることができるか、または大学受験に挑む際に注意すべき点は何であるか、さらには大学生活への適応などを中心とする。

投書1「どうして私はよく集中できないのだろうか」(1980年第12号)

私は中学生です。授業中は集中できず、いつも上の空でいます。本当は先生の授業をよく聞きたいです。でもいつの間にか、気が散ってしまうのです。何を考えていたのか、自分でも良く分かりません。目を大きくして先生をじっと見るようにしていますが、授業の内容は一向に耳に入りません。克服したいと思って、いろいろ試してみました。手で頭を打ったり、メモを取ったりするなど、でも、あまり効果は見られませんでした。そろそろ高校を卒業しますので、焦っています。苦しいです。アドバイスをいただけたら嬉しいです。

湖北省 丁振君より

4-2-2 大学受験に対する受験生の不安や焦燥感

この類の投書では、大学受験という競争率の極めて高い社会上昇移動のルートに対して、若者が大きな心理的負担を抱えながら向き合っていることが伺える。それには、社会階層の存在を非常に明確に認知しており、より高い階層へ上昇移動したいという強い気持ちが表されている。

一方、これらの問題への編集部による回答は、階層の存在自体を否定しようとする公式の説教が垣間見える。

大学受験に関する悩みは、受験の志願選びから始まる。1979年第5号の「青年信箱」では、「大学受験に際してどのように志願を選ぶのか」との読者の質問への回答記事が掲載された。そこでは、各大学の特徴や人材養成の目標の確認、重点大学への集中の回避などの技術的なこと以外に、受験生の志願がホットな専攻ばかりに集中しているという傾向を指摘して批判した。その一部を確認しよう。

記事1(抜粋)

しかし志願選びは、決して単純なテクニカルなことではない。ここ二年以来、全国を受験生の大学選びは次のような傾向が目立っている。一つ目に、自動化、計算機、電子、物理、数学などの専攻を選ぶ人が多く、農林、石炭、石油、地質などの大学や専攻を選ぶ人が少ない。二つ目に、大都市に立地する大学を選ぶ人が多く、辺鄙な地

域の大学を選ぶ人が少ない。三つ目に、普通大学を選ぶ人が多く、軍事系大学を選ぶ人が少ない。18箇所の農林系大学の統計によれば、1977年に合格した大学の新入生7118名のうち、農林系専攻に志願したのは3248人しかいない。この数字は、新中国が成立して以来、農林系専攻に志願した最も少ない人数である。全国重点大学である華東石油学院の場合、1978年に北京で53人の募集計画があるが、第一志望で志願したのは一人しかいなく、第6、7志望で志願したのは少し増しだったが、石油採取、測量、貯蔵と運輸などの専攻に志願したのは一人もいなかった。また、合格したとしても大学に来ない人もいる。

ここでは、当時大学の志願選びに存在していた、当時の若者に人気のある専攻への集中という問題が指摘された。

ここから、当時若者たちが大学受験に際して、自分が感知した社会の在り方への解釈によって選択を行っている状況が伺える。当時、軍事系大学、農林系、石油、石炭、地質などの伝統的な産業に指向する専攻よりも、近代化との関係がより密接な専攻、例えば計算機科学、自動コントロール、電子技術などの専門のほうに人気があった。後者に志願した理由は、「四つの現代化」により大きく貢献できるからだという説を回答者が取り上げているが、それよりも、前者の専攻が「人前に自慢できない」というのが若者の本心だと考えられる。当時大学卒業後の就職は国家による配属制であったため、物質的な「条件の悪い」、辺鄙な田舎で働くような職種、職業に就きたくないということが見て取れる。

雑誌編集者は、「どのような専攻を選んだとしても、同じように四つの現代化に貢献できるような科学技術を身につけることができる」、「理想あり、抱負ありの青年なら、条件の悪い地域、祖国が最も必要とする地域で自分の青春を捧げることを志すべき」などの論理で説得していたが、社会主義の国家イデオロギーに立脚したこれらの言葉は、当時の若者の心に届くことがなかったと考えられよう。

大学受験での失敗に対する緊張感から、受験に挑む若者の精神状態はぎりぎりまで追い詰められていた。次の投書を見てみよう。

投書2「篩にかけられてこそ、真の黄金が残される」（1983年第5号）

ぼくは今年卒業する高校生です。試験を目の前にして、僕の生活は緊張感に溢れています。大学受験という形のない篩（ふるい）によって自分が落とされてしまうのではないかとハラハラして、時には夜の12時になってもなかなか落ち着かなくて寝つけません。このようにして僕の体はだんだん弱ってきており、精神的にもだめになりそうです。とても心配しています。このままだと大学受験まで持たないでしょう。周りのクラスメートに聞いてみると、彼らも同じような悩みを持っているそうです。脳に滋養を与える「補脳汁」を飲むと良いという人もいたり、睡眠薬を飲んだほ

うが良いという人がいたり……ほくは小心者でまだ何もしていませんが、でも、とても不安です。どうすればよいのでしょうか。

湖南 易興華より

この投書から、大学受験の失敗を心配して焦燥感に満ちて精神的に限界まで来ている若者の像が見えるだろう。

4-2-3 大学入試の競争の激化による中高生への心理的負担のしわ寄せ

大学入試の競争の激化により、受験生ではない中学生や高校生へのしわ寄せも大きく存在していた。

投書3「家から追い出されるしかないのか」(1980年第4号)

編集者同志

私は、今年卒業する高校生です。あと数ヶ月したら、全国大学受験に参加する予定で、現在は時間を惜しんで復習しています。最近、両親からよくこんなふうに言われています。「大学受験に合格しなかったら、もうこの家でご飯を食べないで！この家に戻らないで！」と。普段から脅かすような、冷やかしの言葉を浴びせられていますし、私はいつもはらはらして、落ち着くことがありません。合格の人数は限られていることを知っているのに、万が一受からなかったら、どうすればよいのでしょうか。周りのクラスメート何人かに聞いてみましたが、みんなも私と同じような環境にいるらしいです。彼女たちも同じような悩みを持っているようです。何かアドバイスをください。

江西南昌にいる女子高校生〇〇より⁷

また、進学率の低さによる熾烈な競争は、高校生の間関係にまで影響を及ぼしていた。競争による嫉妬などの感情が生まれ、お互いに警戒しあうようになったとの問題である。

投書4「クラスメートを敵にしないで」(1980年第9号)

編集者同志

私の成績は、同じ寮に住んでいるクラスメートと同じ程度です。最初私たち二人は仲が良く、勉強上の問題をよく一緒に議論したりしていました。しかしその後、緊張した勉強生活の中で、なぜか二人は暗黙のうちに競争しあうようになり、ある時期

7 雑誌原文では、投書者の名前が匿名となっている。

ではお互いに邪魔しあったり相手が損するように意地悪をしたりしていました。普段の生活での付き合いも少なくなりました。その結果、お互いの勉強に悪い影響が出ました。もともと仲の良かった友達が、勉強の強い敵となったのです。このままだと、私たちはどうなるだろうと、考えるだけでも怖いです。人を嫉妬するのは低級な趣味だと分かっているし、その友人もこのままにたくありません。でもどうすればよいか、二人とも分かりません。とても悲しいです。ぜひ助けてください。

華南師院 魏羽中より

投書5（抜粋）「弟や妹らには、私たちと同じような大学受験に振り回されてばかりの人生になってほしくない」（1981年第21号）

私の運命を決める指揮棒の動き方によっては、誰もが羨む大学生になるかもしれないし、一介の待業青年に落とされてしまうかもしれない。なので、私は勉強以外の娯楽本を読むことを我慢しているし、この指揮棒に言われるとおりに自分の生活を組み立てており、一日、また一日と続いている。

ここでは、「誰もが羨む大学生になる」か「一介の待業青年に落とされてしまうか」というふうに運命がかかっている不安の中で、過重な学業負担に耐えるのが辛い、自らの意志で「我慢」して暮らしているという葛藤を抱えている生徒の気持ちが伺えるだろう。

4-2-4 学業に関する投書分析の小结

以上では、1978～1984年の『中国青年』雑誌に掲載された学業に関する読者投書を見てきた。

1978～1984年の時期において、農村部の人々は大学受験を「農業の門を出る」ための「登竜門」とみなして、都市部の若者が大学受験を「誰もが羨む大学生になる」か「一介の待業青年に落とされてしまうか」の分かれ道とみなしていることから、人々は、農村部と都市部の間に存在する超えがたい制度的な隔たり、また都市部の中においても職業などによるさまざまな階層ヒエラルキーの存在を明確に認識していると言えよう。

また、まさにこの階層ヒエラルキーの存在という認知から、人々はより上の階層に移動したいという上昇志向のエネルギーに強く触発されており、大学進学という手段に大きな熱望をもって取り組んでいる。

さらに、この時期の学業に関する投書を概観すると、受験生や中学生、またその親たちは、受験戦争の熾烈さに圧倒され苦しい思いをしているが、農村部と都市部の制度的要因による格差の存在、また大学受験制度や知識による上昇移動の秩序に対して不満を持っておらず、逆にそれを逆手にとってこの制度の中で上昇移動を果たしたいと考えていた。その中で、「ほかの人の成功の機会が一点増えていけば、それだけ自分の機会が一点減って

しまう。この一点の機会こそが、自分と友人の分かれ道になるかもしれない」との言葉のように、非常に厳しい競争に満ちている社会だという、社会のあり方に対する解釈が形成されている。総じて言うと、上昇移動する可能性が示唆されており、希望もあるが、それを手にするには、非常に厳しい競争で勝たなければならないという認識だと言えよう。

4-3 職業による社会的地位の不安：職業に関する読者投書の分析

以下では、職業や進路、自己実現についての若者による『中国青年』誌への投書を確認していきたい。そこには、職業による社会階層の存在を感知し、社会的ステータスの不安に突き動かされ、より上の地位を手に入れようとして必死になる若者の姿があった。

4-3-1 職業に関する悩みから見る階層ヒエラルキーに対する認知

この時期において、国家イデオロギーによる文化装置の公式見解では、すべての職業は四つの現代化に貢献するもので平等であるとされていた。すべての職業は、国家や社会に貢献する平等な職業であるとされた。しかし一方、若者は職業の違いは社会階層の違いをもたらすことを、敏感に感知している。

教育達成を通じて手に入れる文化的資源や政治的資源の有無によって、肉体労働者と頭脳労働者という巨大な隔たりが存在する中、「一般の労働者」である工具の一部若者は、自分の仕事に対して誇りを持たず、また実際の生活において他者から尊敬されないという感覚を持ってしまうのである。

投書6 「学歴で僕の価値を高める」(1983年第6号)

僕はプライドの高い青年です。僕の職業は、人々から「三等公民」と言われる船員です。「職業の違いは分業の違いだけであり、貴賤の区別はない」とか、「どんな仕事でも祖国に必要とされている仕事」とかの言い方を良く耳にしますが、だけれども、僕はこの職業で「人より地位がワンランク低い」と思われているという事実や、これが原因でたびたび恋愛で相手に振られてしまったという事実などに変わりありません。

それで、自分の社会的地位を高め、自分の存在価値を高めようと思っています。私は、独学で奮闘していく道を選びました。すべての余暇の時間を割いて勉強に使っていて、今年的高等教育独学試験に参加したいと思っています。学歴を手に入れば、ぼくの価値に相応しいポストに転職することができるのではないのでしょうか。

江蘇省運河航運公司 恵松林より

上記の投書では、職業に関する悩みが書かれていた。当時の国家イデオロギーによる文化装置では、「職業の違いは分業の違いだけであり、貴賤の区別はない」、「どんな仕事で

も祖国に必要とされている仕事」というのが公式見解であるが、都市部の若者たちは「一般の労働者」と「科学者や作家」などの頭脳労働者との隔たりの存在や、職業と階層ヒエラルキーとが密接に関係していることを敏感に感じ取っていたのである。

4-3-2 階層の上昇移動を果たそうとする若者

職業による階層ヒエラルキーの違いを感知した若者たちは、「自分の社会的地位を高め、自分の存在価値を高めよう」として、自分自身の階層ヒエラルキーの上昇につながるさまざまな試みをしたのである。

(1) 教育達成以外の手段で農民の身分から抜け出そうとする農村部の若者

「登竜門」とされる教育達成で失敗したからといって、彼らの都市への憧れが消えたわけではなかった。農村の若者は、農民から抜け出して都市部の人間になろうと、「兵士」「女優」「作家」になろうとさまざまな試みを考えていた。

投書7「女性の兵士になりたいな」（1982年第6号）

私は、どこにでもいそうな、農村で暮らしている平凡な女性の青年で、今年で19歳です。光栄な人民解放軍の戦士になりたいです。そうすれば、革命の大溶炉でより強い人間に成長し、四つの現代化のためにもっと多く貢献できると思っています。兵士になりたいくてなりたくて、病気になりそうです。でも聞いたところでは、女性兵士の募集は農村の女性の青年が対象外とされているそうです。私が女性の兵士になるのがそんなに難しいことなのでしょう。ぜひぜひお力を貸してください！

陝西省長安 軍蓄より

当時では、文学者＝小説家になるのも、教育達成以外の重要な社会上昇ルートの一つであった。「知識」重視の風潮の中で、小説家にでもなれば農民の生活から抜け出せるし、文字が活字になれば、回りから「才能のある人」と見なされ、さまざまな形で抜擢されるのである。1982年第5号「難題征答」では、小説家になりたがる夫のことで悩む女性の投書があった⁸。また、このような投書もあった。

投書8「龍の退治など高望みなことを考えるより足元をしっかりと固めよう」（1984年第2号）

僕は大学受験で落ちた後に、独学で人材になる道を行こうと思って、文学の本をたくさん買って来て、家にこもって勉強して文学創作をしていました。でも、あまり業

8 投書「夫がどうしても小説家になりたくて……私はどうすればいいのか」『中国青年』雑誌 1982年第3号

績を出していません。両親には、家のお金を無駄遣いしたとして、「道楽息子」呼ばわりされたうえに、父親に散髪技術を学べと言われました。でも、私には私の志がありますよ。独学で人材になりたいと思うのは、どこが間違いでしょうか。

山西省 李瑾より

軍人、女優、小説家など、これらの職業は、大学進学できない若者にとって、階層ヒエラルキーの中で最下層とされる「農民」という階層を抜け出せる、限りある方法の一つである。一方、上記の投書で見たように、農村と都市部の隔たりは容易に超えうるものではなく、若者たちはこれらの職業に手が届かず、挫折を味わうことになる。

(2) 「独学」を通じて職業の上昇移動を試みる都市部の若者

「知識重視」の風潮の中で、より良い仕事やより良い境遇を得るためには、最も多くの若者にとって最も有効なルートは、知識を身につけることであった。

都市部で既に就職している若者の場合、その多くは本職との兼ね合いを鑑みながらの独学である。彼らはその中でさまざまな悩みにぶつかり、仕事との兼ね合いや勤め先との調整など、いろいろな問題が発生していた。

1981年第5号の「読者来信」コラムでは、「青年の独学のためにより多くの緑信号を」との特集が組まれたが、そこでは、余暇の時間に独学するが、勤め先から処罰を受けたりする対応にあった若者の声が綴られていた。

投書9「余暇時間の独学は、どんなに難しいことだろう」(1981年第5号)

私は、測量の仕事をしている青年工員だ。自分の仕事が好きだが、普段から自分の知識の量が足りないと痛感している。それで、頑張って独学を始めた。毎朝の6時にラジオの放送を聞いて外国語を学び、夜の9時から国語、数学の勉強を始める。独学が原因で仕事に支障をきたしたことは一回もなかった。逆に、言われた仕事は毎回手際よく完成していた。しかし、意外なことに、某リーダーの人から「本業をおろそかにしている」と言われてしまった。去年給料の調整が行われた際に、グループ長から、いくら勉強ができて役立たないとみんなの前で言われた。また、某幹部から、独学が良くできているのは、労働の態度が悪いことと裏表だと言われた。私にはどうしても理解できないのだ。独学を続けるのが、どうしてこんな難しいことなのか。李白が生きていたら、その詩を次のように改めるだろう。独学は難しい、青天に登ることよりも難しいと。

四川省 徐平より

これ以外に、時間の配分に苦しみ、若者本人の中にも葛藤が生じる場合がある⁹。

（3）仕事と恋愛の狭間に苦しむ「キャリアウーマン」たち

強い上昇志向に突き動かされ、若者はより上の階層ヒエラルキーを目指して、教育資源、政治的資源を手に入れようとして必死に努力する場面を見てきたが、女性の場合を見ると、男性をサポートすべきだという女性に対する社会的期待と彼女たち自身の上昇志向の間に葛藤が生じていることが見て取れるのである。

彼女たちは、この時代を生きる中で、一方で仕事への強い向上心が触発されるが、もう一方で、仕事で業績を出していることは逆に恋愛や結婚の場面において不利をこうむるといった場面にしばしば遭遇する。1982年第9号には、「女性ですが、仕事への強い向上心があります。これは良くないことでしょうか」との投書が掲載された。投書の女性は、仕事に対して強い向上心を持っておりプライベートな生活よりも仕事に多くの時間を割いているが、これが恋人と別れる原因の一つになり、仕事での強い向上心は恋愛・結婚に不利なのではないかと悩んでいるという。

4-3-3 上昇移動の秩序に対する態度

若者たちは輝かしい未来を信じて頑張る中、ふと空しく感じることもある。それは、努力することと「理想的な前途」=良い仕事や社会的地位とは必ずしもつながっていないことに気づいた瞬間であった。

投書10「前途は運命によって決められるものか」（1981年第15号）

僕は社会人になってから、それなりに頑張ってきましたが、いつも運が良くなって、個人の理想がなかなか実現できません。自分の運命はついていないものだと嘆いています。それから、がっかりして元気をなくしてしまい、頑張りたくなくなりました。一方、あまり努力しないのに、たまたま理想的な前途と幸福を手に入れることができたのをよく目にしています。これらのことについて友達と話すと、彼らはいつも次のように言っています。人の運命は天に決められるものであり、個人の努力は無駄だと。編集者同志、人の一生は、本当にみんながみんな運命に決められているものではないでしょうか。

河南省 広生より

投書の若者は、人の運命は努力とは関係なく、「天に決められている」ものだと考えて、

9 投書「余暇の趣味と本職が衝突しています。どうすればよいのだろうか」『中国青年』1981年第16号

落ち込んでしまい、やる気がなくなっているが、「頑張る」ことは必ずしも「理想的な前途と幸福」につながらないことに気づいた瞬間がここにあったと言えよう。

4-3-4 小結

以上では、若者の上昇志向のエネルギーがどのように発散されていたかとの視点から、1978～1984年の『中国青年』に掲載された職業に関する読者投書を整理して考察した。

この時期において、国家イデオロギーによる文化装置の公式見解ではすべての職業は四つの現代化に貢献するもので平等であるとされていたが、若者は職業の違いは社会階層の違いをもたらすことを、敏感に感知していた。若者はその職業によって、社会的地位が低いことを理由に尊重されないことや、恋愛相手に振られてしまうことなどさまざまな現実の壁にぶつかっており、職業による社会的地位の差異の存在がはっきりと映しだされたのである。

そして、職業による階層ヒエラルキーの違いを感知した若者たちは、「自分の社会的地位を高め、自分の存在価値を高めよう」として、自分自身の階層ヒエラルキーの上昇につながるさまざまな試みを行っていたことが見て取れる。

4-4 恋愛・結婚に関する読者の声の分析

恋愛・結婚などのプライベート領域の生活は、当時政府の公式見解では、あくまでも公的領域＝勉強や仕事の従属的補完的な部分であると強調された。また、恋愛・結婚におけるあるべき態度については、「正しい態度を樹立し、共産主義道徳原則」を遵守するよう指導すること大事であると主張し、「パートナーを選ぶ際には、その人の政治的思想的品質や、労働態度を重要視すべきであり、金銭や物質的なものを重視すべきではない」と強調した。

4-4-1 恋愛・結婚に関する悩みから見る階層ヒエラルキーに対する認知

この時期、恋愛や結婚相手を選ぶ際に、相手の出身家庭や物質的条件を見ることが多く見られる。これには、恋愛・結婚関係に身を置く若者本人の親、延いては当事者の若者本人の考え方によく見られた。

(1) 農村部と都市部の超えがたい隔たり

社会区分の存在を感知した人々にとって、さまざまな要素の中で最も敏感なのは、戸籍制度による農村部と都市部との超えがたい隔たりであろう。片方が都市戸籍で、片方が農村戸籍である場合、この恋愛はしばしば親から反対されていた。

投書 11 「母から次のような親孝行を無理矢理要求された」(1983年第12号)

私は県の町で仕事をしている女性で、半年前にある農村の青年と知り合いました。彼は一生懸命働きますし、勉強が好きで向上心もあり、正義感の強い方です。私たち二人は理想や趣味、思想も非常に合っており、お互いのことが大好きで、離れられなくなりました。

しかし母にこのことを知られてから、極力反対されました。その理由はひとつだけ。彼は農村戸籍だから。私がどんなに説明しても、どんなにお願いしても聞き入れてもらえませんでした。そうしたら母は、私のことを不孝な子だと言って、ご飯を食べるのを拒むようになりました。小さいころに父が亡くなっているので、母親は女手一つで私を育ててくれたので、もし母に万が一のことがあったら一生後悔すると思い、彼と別れることを母と約束しました。（中略）親孝行をするには、自分の幸せを犠牲にしなければならないのでしょうか。

四川省彭県 黎紅より

これは、「県の町」という都市部で仕事をする女性と「農村戸籍」の青年の事例だが、女性の母親から戸籍のことを理由に反対された。

このように、農村では恋愛・結婚相手を選ぶ際に相手の社会的地位が重要視されていることにより、婚約した場合でも、一方の社会的地位に変化があると、その関係が切れてしまうことも当時良く見られる現象であった。

1979年第10号「彼はなぜ気持ちが変わったのか」というドキュメンタリー記事が掲載され、浙江省永康県珠山公社の某小学校臨時教師の陳月齋氏は四年前に同公社出身の男性で一般の軍人であった徐広元氏と婚約を結んだが、徐氏が大学生になってからは、徐氏から婚約の解消を迫られたという事情が語られた。記事では、二人の関係の変化について、徐氏の「社会的地位の変化」に帰している。徐氏が大学に受かったことによって徐氏の中で生じた二人の関係の変化について作者は、「この一枚の大学合格通知書は、彼ら二人の関係を、鋤を持って畑で農作業する農民と才色兼備（相対的に言うと）の臨時教師との恋愛から、大学生と土臭い田舎娘との恋愛に変身させた」と解説した。

また、記事では徐氏の手紙を引用し、彼が女性との関係を終わりにしようとする動機について以下のように説明した。

記事2（抜粋）

私たちの愛情はなぜ中断しなければならないのかな。……社会的地位の隔たりが大きいからだ。現在、（わが国では）三大差異¹⁰が客観的に存在しているので、認めないといけない。あなたと結婚したら、経済的な収入が低いので、私たち二人とも良い

10 労働者と農民の差異、都市部と農村部の差異、頭脳労働と肉体労働との差異を指す。

生活を送ることができない。それだけではなく、その影響は後の子孫にまで及ぶだろう。子孫のためには、心を鬼にして私たちの愛情を中断しなければならない……。

このドキュメンタリー記事の叙述から、徐氏は二人の婚約を解消したい理由を二人の社会的地位の隔たりが大きいことに帰していることが考えられる。

(2) 相手の職業や職種を重んじる都市部での恋愛事情

恋愛関係にある双方がともに都市部の人間の場合でも、一般労働者か幹部家庭かなどの階層区分が重んじられていた。

投書 12「私たちの結婚はどうして自分たちで決められないのか」(1981年 第9号)

編集者同志

私は22歳の女性です。現在は学校の代任教師です。二年前に小さい頃の同級生、炭鉱の工員の虎新民さんと恋愛しました。でも、虎さんの父親は普通の工員ですし、虎さん自身も普通の工員です。ですので、私たちの恋愛は、私の両親から乱暴な干渉をされています。

父親の房継増は石炭井鉱務局三鉱の党委員会の副書記であり、権勢をもって抑圧しています。「保衛組の人に声をかけたよ。お前らに結婚証明を出さないようにと」。事実そうでした。父親の権力は明らかにそこにありますから。私と虎とのことで、母親はよく暴力を振るっていました。ある日、もう寝たのに、母は部屋に入ってきて、虎さんと絶交しろと責めてきました。私はどうしてもうんと言わなかったので、母はプラスチックの靴をもって私の頭や背中などを叩きました。頭がふらふらして、背中也腫れていて血痕が出て、針に刺されたように痛くてしょうがありませんでした。また、彼女は、ひどい言葉でものしっていて、「虎のやつはただの工員にすぎず、地位もないし、才能もない。ただの炭鉱工員目なのに、高望みして幹部の家庭と関係をつなげようなんて」。これ以外にも、「親子の縁を切る」と言って脅かしてきました。(中略)

肉体的な、精神的な面で苦しめられて、私は何度も死にたいと思いました。でも、死んだら、虎さんに申し訳ないと思っています。今、私は帰る家もないし、勤め先にもいくのも怖くて出来ません。彼らはいろんなところで私を捜していますから。法律の保護を希望します。私の生活に出口を探しています。上級組織に調査にいらっしやるよう、お願いいたします。

石炭井鉱務局農場学校 房永玲より

恋愛相手の階層的地位を重視するのはもちろん若者の親のみならず、都市部の若者自身

においても、仕事の社会的声望やその出身家庭の条件などが重要視されていた。1982年第11期では、「前に進めず、後ろにも後退できず、私はどうすればいいのか」という女性の投書が「恋愛・結婚難題のカウンセリング」コラムに登場した。

投書13「前に進めず、後ろにも後退できず、私はどうすればいいのか」（1982年第11号）

私は邹萍と言います。26歳の女性です。恋愛のことで、前にも進めず、後にも後退できないような状況に陥っています。あなたたちの助けと指導をお願いいたします。

四年前、私はまだ教師の家族として代替で臨時教師をしていた頃、仕事を通して、本校のある男性教師と知り合い、恋愛関係を持ちました。（中略）去年の六月に正式の教師になってから、母親はいろいろ聞きまわって結婚相手を探し始めました。最近、知人に頼んで病院のお医者さんを紹介してくれました。身長や顔といい、仕事や出身家庭といい、いろいろな面で今度のお医者さんのほうが今の彼氏より良いのです。社会的な雰囲気や、周りの同級生の状況を見ていると、結婚相手を決めるときに、相手の条件を考えない人がいるのでしょうか。いません。誰でも、各方面の状況が完璧で申し分のない男性と結婚したいでしょう。誰でも、自分の前途と今後の生活のために考えるでしょう。映画で見せられたことや書籍で書かれたことは、それはあくまでも仮のもので、真実ではありません。ですので、基本的には、今の彼氏と別れることを心に決めました。（中略）このような状況の中で、今の彼氏と別れるのは、婚姻自由の精神に合うのでしょうか。今の彼氏がこれをもって訴訟を起こしたら、私はどのような責任を問われるのでしょうか。

山西省高陽県 邹萍より

さまざまな投書の中でも、この事例のように、「映画や本」などの文化装置で提唱される考え方と周りの現象とのギャップを提起して、自分自身の欲のままに選ぶと明言するようなものは少なかった。「映画で見せられたことや書籍で書かれたことは、それはあくまでも仮のもので、真実ではありません」と自分の中で判断の基準を入れ直し、今の恋人と別れることを決めたわけである。

このような時代背景の中で、外見や職業によって代表される物質的な条件を重視すべきか、それとも精神的な要素を重要視すべきかに関して、80年代初頭においては議論を呼びやすい話題であった。1982年第2号から、「みんなで話そう」コラムに「この結婚は親の意見に従うべきか」と題する大討論が行われ、1982年第4号、第5号、第7号と連続4回にわたって続いた。

さらに、恋愛・結婚の場面における人々の社会的地位の執着は、豪華な結婚式を行うこ

とも表される。豪華な結婚式をしようと、女性の実家が相手の男性に多くの結納を要求し、それが原因で男性のほうで大きな債務を蒙ってしまったり、両家の関係が悪化し事件にまで発展したりするようなことが当時よくあった。若者はなぜ豪華な結婚式を設けたいのかということについて、1981年第23号の投書では、次のような意見が述べられ、「人から低く見られたくない」との理由があった。

投書 14 タイトルなし (1981年第23号)

編集者同志

貴誌の第20号に掲載された「結婚式を、怨念を伴わないものにしよう」との文章を読んで、深く感動し、結婚式が行われる際にして現れてきた良くない風潮について認識が深まりました。しかし、僕はやっぱり自分の結婚式を簡素なものにするつもりはありません。僕は思想が立ち遅れていて、時代の流れに遅れた人間だと言われるかもしれませんが、ほくには僕なりの理由があります。

まず、結婚という人生の一大事を非常に重要視しています。(中略)

結婚を質素なものにしたくない2番目の理由は、人に低く見られたくないことです。こういうと虚栄心が強いとか批判されそうですが、僕は自分ではプライドだと思っています。文化的教養のない両親の家庭に生まれた工員の子どもは、実際にやっぱり低く見られているんです。幹部の子どもや知識分子の子どもの結婚式は、われわれ工員ほど見栄を張って派手にやらないのは容易に理解できます。彼らは普段から裕福な生活をしているから、結婚式ぐらい比較的質素なものにしても、みすぼらしいとか、貧相だとか言われることはありませんし、逆に風雅だと思われるでしょう。しかし、私たちが簡素な結婚式をしたら、冷やかに嘲笑されます。嫁をもらう結婚式でさえ貧相なものにしか出来ないのなら、その後の生活もよいものとならないだろうと思われてしまいます。運命の寵児とでも言えるような人たちがいて、彼らの一生の中では、主役になる機会が多い。しかし僕のような人間は、一生の中でヒーローになる出番は結婚式ぐらいでしょう。このときだけ、自分の意志のままで、みんなの前で格好をつけて現れます。なので、この特別な日、自分で宣言する機会を格別に重要視せずにはいられないのです。

これが私の理由です。

編集者同志、あなたたちの意見を聞かせてください。

北京 程志山より

投書の若者は、自分がなぜ見栄を張って派手な結婚式にしたいのかについて、その理由の一つに「人に低く見られたくない」というのがあったが、その際に、「文化的教養のない工員の子どもの家庭に生まれたもの」としての自分と「幹部の子どもや知識分子の子ども」と

比べて、普段から「低く見られる」感があることにより、結婚式を質素なものにしたら、「みすばらしいとか、貧相」だとより低く見られることを避けようと、盛大に結婚式を挙げたいといっている。投書した若者は、文化的教養のない工員と文化的教養のある幹部、知識人との社会的地位の違いを意識しているといえよう。

4-4-2 恋愛・結婚に関する投書分析の小结

1978年～1984年の『中国青年』雑誌に掲載された恋愛・結婚に関する投書を見てきたが、次のようなことが言えるだろう。

『中国青年』によって代表されている政府の公式見解では、恋愛・結婚というプライベートな領域は、あくまでも公的領域＝仕事や勉強の従属的補完的部分であると強調され、また恋愛・結婚に対するあるべき態度として、相手の「政治的思想的品質や労働態度を重要視すべきであり、金銭や物質的なものを重要視すべきではない」とする。

しかし一方、若者やその親たちは、戸籍制度による都市部と農村部の社会的隔たり、また都市においては一般労働者と幹部の社会的地位の違いなど階層ヒエラルキーの存在を明確に感知しているため、このような認知から、恋愛や結婚相手を選ぶ際に、相手の出身家庭や物質的条件を見ることが多く、時には世代間の激しいバトルにつながる。

都市部と農村部との戸籍の違い、また職業などの物質的な条件も恋愛相手を選ぶ際の重要な条件であった。恋愛関係にある双方が都市部の人間の場合、一般労働者か幹部家庭かなどの階層区分が重んじられていた。

5 結論

以上では、学業、職業、恋愛・結婚という三つの面から、1978年～1984年における若者の上昇志向を見てきた。そこには、政府の公式見解などの公的文化装置とは違う論理で動いている生活世界があった。では、そこから見える、階層構造の存在に対する認知、上昇移動に関する悩み、社会上昇移動の秩序への態度はどのようなものであっただろうか。

どんな職業に従事してもその社会的地位は平等であり、従って「四つの現代化」という国家目標の実現のために知識を習得して貢献すべきだという、公的文化装置による人々の上昇志向に対する方向付けに対して、都市部と農村部の違い、肉体労働と頭脳労働の職業の隔たりなど、若者たちは実際に学業、恋愛・結婚、職業などの実生活の様々な場面で社会的地位の不平等を体感し、社会階層の存在を明確に認知し、自分自身の社会的身分に関して多くの不安や苦痛を味わった。「三大社会的不平等」と称される既存の社会階層システムの中で、社会的地位の向上を目指し、学業、職業、恋愛・結婚などの面においていずれも強い上昇志向を見せた。

その中で、大学入試制度の再開や幹部の登用における学歴重視などの社会上昇ルートの

制度的条件の整備によって、知識の習得を通じて教育達成を遂げることが、社会的地位の向上を果たす最も有力な手段とされていた。またそれを巡って激しい競争が繰り広げられたのである。

また、総体的にいうと、このような社会階層構造に対して、また農村部と都市部の制度的要因による格差の存在、また大学受験制度や知識の習得による上昇移動の秩序に対して、人々は乗り遅れることに不安を持っているが、不満の態度はあまり多くみられず、逆にこのような不平等の存在を逆手にとってこの制度の中で上昇移動を果たしたいとの一面が伺われた。

はじめの問題意識に戻ると、改革開放初期、即ち70年代末から80年代初期の中国では、集団本位で人々を統括しようとする公的文化装置とは別に、人々はあくまでも自分の生活世界の中で体感したこと、即ち階層構造の存在、社会の在り方に対する認識、上昇移動の秩序に対する態度などを持って動いていると言えよう。すなわち、集団本位を提唱する政府の公式見解とは違って、人々は自分自身の経験から感知した生活世界の論理で上昇移動を果たそうとしていたわけである。

参考文献

- 中国社会科学院 1993『中国青年大透视——関与一代人的価値観演変』北京出版社等
王曉明 2000「90年代与新意識形態」林大中編『90年代文集』
許紀霖 2007「世俗社会的中国人精神生活」『天涯』2007年第10号
李春玲 2004「社会政治変遷と教育機会不平等」『中国社会分層』陸学芸編著 2004 社科文献出版社
—— 2006「当前中国人的社会分層想像」『当代中国社会分層』社科文献出版社
李強 1993『当代中国社会分層与流動』中国経済出版社
—— 2000『社会成層与貧富差別』鷺江出版社
陸学芸 2002『当代中国社会階層報告』社科文献出版社
奥村隆 1997「文化装置論に何ができるか」『社会学に何ができるか』八千代出版
園田茂人 2001『現代中国の階層變動』中央大学出版社
園田茂人・菱田雅晴 2001『經濟発展と社会變動』中央大学出版社
見田宗介 2008『まなごしの地獄』河出書房新社
閻雲翔 2012『中国社会的個体化』上海訳文出版社

キーワード 階層上昇移動、階層上昇意識、読者投書、生活世界、文化装置

(WANG Feng)

